

付加価値創出の事例1 「秋の黄金井フェア」

小金井市では、市内の農家が東京の伝統野菜である江戸東京野菜を栽培し、それを使ったオリジナルメニューを「黄金井」として市内の飲食店が提供するという、農業と商業が手をとりあった取り組みを期間限定で毎年実施しています。

黄金井に使われる江戸東京野菜は7種類（金町こかぶ、伝統大蔵大根、しんとり菜、東京長かぶ、馬込三寸人参、伝統小松菜、亀戸大根）ありますが、これらを井ぶりだけでなく、カレーや麺類、



(出典：江戸東京野菜のまち「小金井」HP)

和菓子などに各飲食店がバラエティ豊かにアレンジしており、目も舌も楽しむことができます。また、江戸東京野菜を使った料理教室なども開催しており、黄金井を食べるだけでなく作ることもでき、参加者から好評を得ています。

付加価値創出の事例2 「弓削牧場」



▲チーズを使用したフルコース
(出典：農林水産省「平成23年度食料・農業・農村白書」)

兵庫県神戸市で酪農を営む弓削牧場は、自家加工した乳製品を使った料理を提供する農家レストランを運営しています。このレストランは、看板商品である独自製法のフレッシュチーズの料理への活用を通じた販売促進を主目的として、1987年に開設されました。1997年以降は、牧場内でガーデンウェディングも行っており、2010年までに100組のカップルを送り出しています。

現在、このレストランは、料理などの提供の場のみならず、ワークショップやライブなどのイベントの開催、都市農業に関心をもつ人との交流の場としても活用されています。

(2)作付け方法の工夫

多摩地域の農業は、前述のとおり露地野菜に比べ施設野菜の割合が低くなっており、この点をいち早く改善できれば、台風などの天候や他地域の作柄概況などによる外部的な要因の影響を受けづらくなると考えられます。

しかし、一般的なビニールハウスなどの施設による作付け方法は、他地域でもすでに導入されており、また、土地生産性や労働生産性においても、他地域との差別化を図ることは難しい状況になっています。

そうした中、近年注目されているのが「植物工場」と呼ばれる、温度や湿度などをコンピューター管理して野菜を栽培する手法です。植物工場は、屋外の気象条件に左右されることがなく、一年を通じて安定した生産を見込めるとともに、土ではなく水槽などの水耕栽培により多段式に栽培ができるため、土地面積当たりの生産性が高いことが特徴です。また、トラクター

で畑を耕す必要もないため、軽作業が主体で効率的な生産ができます(図表9)。



図表9 植物工場内の様子

(出典：農林水産省・経済産業省「植物工場の事例集」)

さらに、植物工場は害虫などの侵入がない閉鎖された環境のため、無農薬で栽培でき、また、野菜にとってストレスの少ない環境で栽培できるため、露地野菜に比べて野菜特有のえぐみが少ないなどの利点もあります。特に、最近では技術革新や研究開発が進み、発光ダイオード(LED)を利用した新たな栽培方法により、ビタミンなどの栄養価を露地栽培より高めることができる

ようになっています。

多摩地域においても、植物工場をすでに導入している農家や産学連携で取り組んでいる事例があり、今後の都市農業の可能性として期待が高まっています。

一方で、植物工場は農業としてだけでなく、まちづくりの新たなツールとしても注目されています。

例えば、植物工場は、比較的小規模なスペースにも設置が可能のため、鳥取県鳥取市では、中心市街地の空き店舗に「まちなか植物工場」を設置しています。この取り組みにより、中心市街地の活性化とともに、市内のLED関連企業での植物工場用LEDの開発や異業種からの農業分野への参入など、新たな雇用創造につながるのではと期待されています。(図表10)。



(出典：鳥取市雇用創造協議会HP)

また、長引く不況や円高などの影響で国内の製造業が立ち行かなくなり、生産拠点の集約など企業(工場)の移転や閉鎖が続いていますが、それは多摩地域においても例外ではありません。しかし、この跡地を植物工場として再利用することにより、多摩地域における新たなものづくり産業の創出にもつながり、企業が撤退した影響を最小限に抑えられる可能性があります。

5. まとめ

以上のように、多摩地域の農業は、6次産業化と植物工場の取り組みにより、「農業で十分な収入を得られ」、「休みや労働時間が平均的」となるだけでなく、地域全体の活性化にもつながる

可能性があると考えられます。その結果、農業に対する評価が見直され、子どもたちが農業の素晴らしさや重要さに気づき、「子どもが就農を希望する」ようになるのではないのでしょうか。

今回の調査で紹介した6次産業化や植物工場の取り組みにおいて、資金面やノウハウなど、越えなければならないハードルは決して低くありません。

特に、植物工場については、現段階では生産できる野菜の種類が限られているため、普及はまだ難しい状況にあります。しかし、将来的には、漁業のように養殖漁業と沖合漁業といったような棲み分けが進むと考えられ、都市農業の新たな可能性を秘めています。

本来農業は、人間と身近な存在であり、都市と農業というように対立して考えるべきではありません。価値観やライフスタイルが多様化した現代において、農業に対しても様々な考え方があると思われます。従来通りの畑だけでなく、植物工場などの施設、そして住民も利用できる市民農園といったように、都市農業としての選択肢が多摩地域の農業には数多くあります。

都市と農業が調和した多摩地域の「新たな農」が、新鮮で安全な農作物を生み出し、まちづくりの重要な役割を担い続けられるように、「たまには」多摩地域の農業について考えてみてはいかがでしょうか。

- i 数値は、2009年(ただし、日本は2012年度)。総供給熱量に占める国産供給熱量の割合で、畜産物については、輸入飼料を考慮している。
- ii 「特定農地貸付けに関する農地法等の特例に関する法律」及び「市民農園整備促進法」に基づき開設されたものの各年度末現在の数値。
- iii 明確な定義は定められていないが、一般的に市街化区域及び市街化調整区域の農業を合わせて都市農業としている。
- iv 経営耕地面積が30a未満で、かつ、年間の農産物販売金額が50万円未満の農家。
- v 経営耕地面積が30a以上、又は、年間の農産物販売金額が50万円以上の農家。
- vi 所有耕地から他への貸付耕地及び耕作放棄地(以前耕作していた土地で、過去1年以上作物を作付けせず、この数年の間に再び作付けする意思のない土地)を除き、他からの借入れ耕地を加えたもの。
- vii 平成21年度農林水産情報交流ネットワーク事業全国アンケート調査「食品及び農業・農村に関する意識・意向調査結果」
- viii 当初は足し算(1+2+3=6)であったが、各産業の単なる寄せ集めではなく、有機的・総合的結合が必要であり、また、第1次産業である農業が衰退、つまりゼロになってしまえば成り立たないため、掛け算とした。